

精神障害者が生きづらさを持ちつつも働くことの意義

青木 聖久

要旨

本稿は、筆者の精神障害者との30年間のかかわりや、研究の蓄積を基にした上で、働くことに関する先行研究から、精神障害者が生きづらさを持ちつつも働くことの意義について論じたものである。

精神障害者は、幻覚や妄想等の疾患、思考や対人関係の苦手等の障害、さらには、自らが持っている内なる偏見や周囲から受ける外なる偏見等の生きづらさを抱えている。とはいえ、概して精神障害者の生きづらさはわかりづらい。なぜなら、見た目と経験則によって理解しづらいからである。そこで、本稿ではこれらの生きづらさを可視化しやすいように、具体例等を挙げながら、①精神疾患、②精神障害、③内なる・外なる偏見に分けて論じた。

一方で、人は精神障害の有無に関わらず、働くことによって、物理的、あるいは、精神的に多くのものを得ることができる。本稿では、その働くということについての語源、働くことの価値、働くことにより達成可能な社会的つながりや社会的承認等について、経済学者や労働法学者等の先行研究を通して論じた。働くはworkとlaborに分けることができる。とりわけworkは、活動によって得られる作品を含め、広い意味を持つ。また、働くことの価値としては、経済的な報酬は一つの要素にすぎない。視点を広げることによって、働くことは人間形成をはじめとする多様なものが得られるのである。

そして、本稿では精神障害者が生きづらさを持ちつつも、働く意義がどこにあるのかについて述べた。精神障害者は生きづらさにより、働き方に一定の工夫や配慮は求められよう。だが、働くことによって、豊かな人生につながる側面が大いに認められるのである。また、働くことを考えるにあたっては、精神障害を持っているからこそ提供しうる、他者には代えがたい事柄としての活躍の場を創出することも大切となる。加えて、社会は、ストレングス視点で捉えれば、希望と可能性に満ちている。精神障害者は、働くことを通して社会とつながり、自己有用感を得られるといえよう。

キーワード：精神障害者、働く、生きづらさ、価値、ストレングス

1. はじめに

筆者は、自身がまだ5歳になるかならないかの頃、母親のパート先において、「大きくなったら、学校行って、それから、ちんちもうけをする」と言っていて、周囲の大人の笑いを誘っていたことを、断片的にはあるが覚えている。筆者が生まれ育った淡路島では、働いて賃金を得ることを、「ちんちもうけ」と言っていた。人は周囲、とりわけ、家族の影響を強く受けながら、就学を終えると、次は働く¹⁾ことを、当たり前のように刷り込まれてきているのではないだろうか。それは、後に精神障害を持つことになったとしても、である。

そのような中、筆者は精神障害者（以下、本人と表現することもある²⁾）の生活支援に携わるようになって約30年になる。すると、従来当たり前の人に人が働く、というように抱いていた考え方自体が変更を余儀なくされている。「働きたいけど、意欲がわからない」、「精神障害があることを事業所に伝えると、雇ってもらえない」等、精神障害者は、働くにあたって、多くの課題に直面することが少なくないのである。それこそが、生きづらさ³⁾に他ならない。しかしながら、彼らの生きづらさは、周囲から理解しづらい。いや、彼ら自身、及び、家族からしてみても、わかりづらいことから、生きづらさと折り合いをつけた働き方をするには、一定の時間を要することになる。

一方で、働くことによって、これまで見たことのないような充実感に満ちた精神障害者の表情に、筆者は何度となく出会っている。また、働くことを暮らしの目標に据えている者もたくさんいた。

精神障害者は、疾患や障害による生きづらさを抱えていることは紛れもない事実である。しかしながら、彼らは、生きづらさがあるからといって、働くことを放棄しているわけではない。大事なこととして、多くの精神障害者は、生きづらさと付き合いながらも、人生を有意義に過ごすために、働くことを望んでいるのではあるまいか。ただし、具体的に、等身大の働き方をイメージできている者は少ないかもしれない。

以上のことをふまえ、本稿では、精神障害者の生きづらさを可視化すると共に、働くことについての意味を整理することによって、働くことの魅力と可能性を探りたい。その上で、精神障害者が生きづらさを持ちながらも、働くことの意義について迫ることが目的である。

2. 精神障害者が有する生きづらさ

精神障害の中でも、暮らしに多大な生きづらさを有する代表的な疾患として、統合失調症を挙げることができる。統合失調症は思春期ごろに発症することが多く、旅立ちの病と言われることもある。例えば、高校を卒業して、親元を離れ、一人暮らしを始めるという、まさに旅立ちの頃に発症するのである。

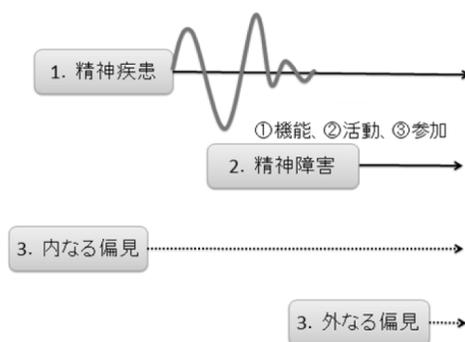
そのような精神障害者の生きづらさによる特性を説明する際、筆者は「しんどさ」という言葉を好んで使っている。しんどさは、「しんど」という名詞の派生語である。大辞林第3版には、「しんど」について、「心労の転」としての「近世上方語」と記されている（松村 2006：1301）。関西では、あいさつをする際、「最近、どないよ」と近況を問うと、すかさず相手は、「しんどいなあ」と笑顔で返答することが少なくない。要するに、「しんど」とは、必ずしも重篤な状態とは限らないが、疲れや不便さが生じている時に使うもので、誰もが当たり前に持ち得るものだということになる。そのような中、精神障害者は、3つのしんどさを持っているといえる。

(1) 精神疾患

精神障害者が精神科医療につながるのは、図表1において、大きな波を示しているように、幻覚や妄想等の活発な陽性症状が出現し、家族をはじめ周囲がそのことに気づいた場合が多い。これが1つ目のしんどさの出現であるが、以下のことを忘れてはいけない。

それは、派手な陽性症状がなく、社会生活がそれなりに行えている場合は、たとえ生きづらさを抱えていたとしても、必ずしも精神科医療につながらない、ということである。そのような場合、本人は、違和感を背負ったまま、治療を受けることなく、暮らしを継続しているといえる。一方で、精神科医療につながった人の多くは、意に反する入院を余儀なくされることがある。そうなると、本人は当然に、抵抗を示すことになる。時には、必死に抵抗するあまり、大声を出したり、器物を破損してしまうこともある。その際、「精神保健及び精神障害者福祉に関する法律」では、精神保健指定医が入院の必要性を認めれば、本人の意思に反して合法的に入院を決めることができるのである⁴⁾。

筆者自身、ソーシャルワーカーになって間が無い頃は、これらの入院時の本人の抵抗は、精神疾患の特性によるものであり、時に、何を言っても伝わりづらいし、向き合うことに無力感を覚えたことさえあった。だが、それは間違っていることに気づいた。彼らは、その当時のことを鮮明に覚えており、入院を拒否する自分の意見を受け入れて貰えない悔しさを、これからどのようになるのかという先が見えない不安に苛まれていた、と言うのである⁵⁾。



図表1 精神障害者が有する3つのしんどさ

図表1の1. に話を戻そう。精神疾患による症状としての大きな波は、薬物療法により、早期に沈静化することが多い。事実、筆者が懇意にしている精神科医師は、「色んな診療科で薬を出されるが、精神疾患の急性期に処方する精神薬ほどよく効く薬は他にない」と言うほどである。その薬を、多くの精神障害者は、その後の人生において、予防的な側面を含めて長期間にわたり服薬を継続することが一般的だといえる。そのようなことから、精神障害者は、「薬という車いすに乗った障害者」と言われることもある。

(2) 精神障害

その後、精神障害者は、図表1に示しているように、精神疾患を持ちつつも、2つ目のしんどさとしての精神障害が出現することになる。ところが、他の障害と比較しても、精神障害ほどわかりづらい障害はない。それは、主に2つの理由による。1つ目は、見た目にはわからない障害であることに加えて、2つ目は、経験則によってわかりづらいからである（青木 2010）。人は他者を理解しようとする場合、自身のこれまでの経験、及び、身近な者の経験を土台にすることが一般的だといえる。そのことから、精神障害について想像ができないと、元々自身が有している経験や価値観に結びつけた捉え方になってしまうのである。その結果として、「気合がないから、病気が改善しない。頑張りが足りない」等という叱咤激励等につながってしまうことになる。

そこで、世界共通の基準として近年において用いられることが多い世界保健機関のICFによる、①機能、②活動、③参加の側面から精神障害のしんどさを論じることにする（障害者福祉研究会 2002）。ただし、ここでは、前述したように、精神障害が見た目と経験則によって、わかりづらいことから、図表2に示すように、視力障害のある秋山さん（仮名）の事例を用いた後、同様に、精神障害のある馬場さん（仮名）の事例を用いて、理解を深めることにしたい。ちなみに、本稿で用いる事例は、筆者の約30年間の実践を元にした、架空事例であることを断っておきたい。

秋山さん（22歳、女性）は、考古学者を目指し、大学院へ進むために学業に励んでいた。そのような最中、交通事故によって、失明したのである。彼女は、一次障害として、視力・視界という①機能の障害を負った。そのことから、二次障害として、これまで駅の案内板を頼りに、電車等を自由に乗り継いでいたのだが、②行動が制限されると共に、本が読めなくなったのであ

障害種別	一次障害 ①機能	二次障害 ②活動	三次障害 ③参加
視力障害 のある 秋山さん	失明	駅の案内 板が見え ない	教育を受 ける機会 の制約
精神障害 のある 馬場さん	思考 障害	対人関係 が苦手	就労制約

図表2 障害の在処（ありか）

る。だが、秋山さんは不屈の精神で点字を覚えることによって、大学院に合格できる力をつけた。後は、研究者になるための第一歩としての受験を待つだけだと思っていた。そして、受験上の配慮願いのこともあり、念のため、大学に視力障害のことを伝えた。すると、意外な回答が返ってきたのである。

「すみません。本学では、視力障害のある人が学べる環境が整っていませんので、入学を受けることができません」と、大学から伝えられたのである。言うまでもなく、秋山さんは落胆した。なぜなら、彼女に問題があるわけではなく、そこには、三次障害として、大学側の施設環境の問題から、③参加制約として、教育を受ける機会が制約されたのである。

次に、馬場さん（30歳、男性）の事例を紹介する。彼は、大学時代に統合失調症を発症して、以後、精神疾患と付き合いながら、地域で暮らしていた。真面目な性格から、人からの信頼も厚いが、こだわりが強く、一つのことが気になると、周囲が見えなくなる傾向にあった。そのような彼は、地域活動にも、熱心に取り組んでいた。そうした最中、回覧板で、2か月後の第2日曜日に地域の清掃が決まったことを知った。ところが、その日はどうしても別の用件があり、出席できないことを申し訳なく思い、翌朝馬場さんは、地域の自治会役員の銚子さん（仮名）の自宅に電話をかけた。電話に出た銚子さん（38歳、女性）は、2人の小学生を学校へ送り出す準備に追われていた。10秒が惜しくて仕方が無い時間帯だった。そこに、要領を得ない感じの馬場さんより、ゆっくりとした口調の電話がかかってきたのであった。銚子さんは、急いでいることを伝えたく、早口で話したり、用件を終えられるような言動を繰り返したが、馬場さんには伝わらなかったのである。

すると、電話を切り終わった後、銚子さんは怒りが頂点に達し、「奥さん聞いてくれる。3丁目の馬場さん、朝の忙しいときに、スローペースで、くどい話をしてくる。本当に困った」と、周囲に触れ回った。その結果、馬場さんに対して、状況判断が悪く、困った人という評判が広まってしまったのである。

しかし、馬場さんは意地悪をしたのではない。それは、一次障害としての①機能障害から、銚子さんの反応に対して、思考が十分に機能しないことによるものだった。実は、馬場さんは、銚子さんとの関係に限らず、思考障害等から、他者とのコミュニケーションがうまく構築できず、二次障害の②活動制限として、対人関係の苦手さが生じているのである。

このような馬場さんだが、元来の真面目さから、後に、食品メーカーに就職が決まった。その会社では、タイムカードが無いことから、ほとんどの従業員が始業時間ちょうどぐらいに出勤するものの、馬場さんは、常に5分前出社を続けていた。ところが、その会社には、毎月第一日曜日のみ、社長の堂本さん（仮名）が10分前に出勤することが従業員の間で、当たり前のこととして認識されていた。そのことから、その日ばかりは、ほとんどの従業員は、15分前には出社することが暗黙の了解になっていたのである。しかしながら、馬場さんはいつも通り、5分前出社を続けていた。堂本さんは、自分より遅く出社する馬場さんに対して、無言で怖い表情を見せるが、伝わらなかった。なぜなら、馬場さんは思考障害があり、堂本さんの非言語の表現を、う

まく察知できなかったからである。こうして、結果的にその会社に居づらくなった馬場さんは、半年間で会社を辞めることになった。このように、精神障害者は、三次障害としての③就労制約を生じやすいのが特徴だといえる。

(3) 内なる・外なる偏見

そして、最後の3つ目のしんどさが、「内なる・外なる偏見」である。まず、図表1の内なる偏見が、精神疾患の発症前から、始まっていることがわかるだろう。そのことを象徴するような言葉を筆者は20数年前に一人の精神障害者から聞いたことを、未だに忘れることができない。それは、「障害年金を受けるということは、社会の偏見も含めて受けることになります。だから、私は受給しません」というものである（青木2013:i）。実は、その後も、同様の話を多くの精神障害者から聞くことがあり、そのようなことが大きなきっかけとなり、筆者は障害年金に着眼した精神障害者の生活支援の研究に取り組むようになっていく。

前述のように、就労制約されやすい精神障害者は、結果的に経済困窮状態に陥ることが少なくない。その彼らの日常生活の困難さに対して、支給される所得保障制度が障害年金なのである。ところが、発症以前、精神障害に負のイメージを抱いていた精神障害者は、「精神障害者」という集団に自らが入ることに躊躇することがある。これが、内なる偏見だといえる。

一方で、十分に障害受容ができていくか否かは別にして、精神疾患や精神障害と一定程度の折り合いをつけながら、暮らしを営むことを決断する精神障害者は多い。江藤さん（仮名：男性、45歳）もその一人だった。彼は、単身生活を目指し、不動産屋にアパート探しに出かけた。ところが、江藤さんが精神科に通院していることを知ると、とたんに不動産屋の小川さん（仮名）は機嫌を損ね、長時間にわたり失礼極まりない言葉を彼に浴びせた。そのうえで、「うちには、あんたに貸すようなアパートは無い。よそに行ってくれ」と言うのである。

江藤さんは、発症してから25年の年月を経て、ようやく精神疾患や精神障害と折り合いをつけながら、生きていこうと決断した。だが、小川さんとのやり取りを通して、「やっぱり、世間の風は冷たい」と感じたのである。これが、外なる偏見というものである。

精神障害者は、このように3つのしんどさという生きづらさを持って暮らしていることになる。当然、生きづらさが無い方が暮らしにおける不便は少ない。だが、不便があるからといって、精神障害者は働くことを希望しないわけではない。もっとも、精神障害の有無に限らず、働くとは人々の暮らしにどのように位置づき、どのような意義があるのか。これらのことについて以降は論ずることにしたい。

3. 人々の暮らしにおける「働く」ことの位置づけ

(1) 働くことの語源と意味

ビジネス倫理の研究者であるジョアンは、仕事の意味を考えるにあたっては、仕事（work）、

労働 (labor), 苦役 (toil), 職 (job) の4つに分けて考えることが大切だと言う (Joanne 2000 : 59). とりわけ, labor と work の違いについて, 「labor は肉体労働する人一般を指すのに対し, work は仕事の成果物や仕事そのものを指す」と論ずる (Joanne 2000 : 74). このように, 働くにおいて, work は, 働くことを構想する準備や, プロセスの中での創造性の部分も含む広い概念だと捉えることができる. 一方, labor は「体力を売ることであり, 往々にしてそれは何の生産物も生み出さない」とジョアンは言う (Joanne 2000 : 72). ちなみに, toil は, 「継続的で疲れる労働」を意味し, 当初, 騒動や災難を意味する等, 極めてネガティブな語源だったとしている (Joanne 2000 : 74). 一方 job は, labor や toil と比べると, 今日ではグッドジョブ : good job と, 日本でも明るく用いられている. だが, job の語源として, アメリカ英語に最初に登場したのが 1858 年であり, 「お金のためにやる仕事, 賃金の支払われる地位, および雇用」というように, 一時雇用を指していると言うのである (Joanne 2000 : 77-78).

このことは, 経済学者の杉村も, 切口は異なるものの, 働くについて, 同様の整理をしている. 「働くことは, 生きることのすべてではないにしても, 生きることそれ自体の重要な部分であり, 生活や人生の全体とつながっている. 『仕事』という言葉は, 働くことのこの意味合いをより強く帯びているといえる. 『労働』は骨折りや苦しみを意味する『レイバー』に, 『仕事』は行為や作品をも意味する『ワーク』に, しばしば対応させられる」と言う (杉村 1997 : 44-45).

労働法学者の水町は, 旧約聖書 (創世記) 第3章を用いて, labor の語源について説明している. 「禁断の木の実を食べたイヴとアダムは, 神から『苦しんで子どもを産むこと』と『食べ物を得るため苦しんで働くこと』という罰を課された」と引用し, そのうえで, 「英語の labor という単語には, 骨の折れる仕事 (労働) という意味のほか, 出産の痛み (陣痛, 分娩) という意味がある」と論じているのである (水町 2011 : iv-v).

このことに関連して杉村は, 「みずからの手で大地から命の糧を取り出す労苦は, 神によって与えられた罰であった. 労働は神による義務であり, 怠惰は戒められた」と, 労働が義務であると共に, 労苦という位置づけにあると論じているのである (杉村 2009 : 36).

また, 労働の歴史的な変遷については, 社会哲学・社会思想史研究者の今村の論考が示唆深い. かつて, ヨーロッパでは, 労働を行政統治の中心に据えられることになっていた. そして, 「労働は, 経済的にして統治的になり, 宗教的にして教育的になる」と言いつつ, 「労働という一語のなかに, すべての要素が集中する」と述べる (今村 1998 : 36). 今村は, 労働は, 人々の生活を経済的に安定させると共に, 人としての成長にもつながる教育的な要素があると論じているのである.

このように, 働くとは当初, 「労苦」という言葉に代表されるように, 決して主体的であり, 創造性に富むものとしては, 位置づけられていなかったことがわかる. それが, 現代では, 次項で示すように, 時代の流れと共に, 働くことの捉え方が変化を遂げているのである.

(2) 働くことにより得られる価値

経済学者の橋木は、働くことについて、勤労の動機から以下の5点を挙げている。それは、①「食べるため」、②「他人に認められたいため」、③「働くことによる成果の美を求めるため」、④「労働には喜びがあるから」、⑤「余暇の時間を有意義に送れるための糧を得るため」、というものである（橋木 2009：26）。

橋木の論考は、前述の（1）の働くことの意味からすると、働くことによる間接的な価値を認めていることがわかる。特に、②～⑤は、労苦という概念とは異なる、働くことによる物理的側面に加えて、精神的側面が加わっている多面的価値が示唆されている。

このことに関連して、杉村は、「労働は、生活のため、あるいはカネのための経済的な手段的活動という以上の意味を帯びうる」とした上で、「労働は多面的な意味を内包し、意味を生み出すことができる。それゆえ、労働する側からすれば、その労働に働くことの意味を求め、引き出すことができるのである。個人にとってそれは、働くことの喜びであったり、自己実現・自己表現であったり、自己成長であったり、他者とのつながりであったり、個々の働きがいであったりする」と論じている（杉村 2009：51-52）。

また、経済的な手段として近年注目されている「ベーシックインカム」と働くこととの関係について、福祉社会学を専門とする研究者の武川は、「ベーシックインカムが贅沢な暮らしができるくらいに高額であるならば、たしかに誰もが働かなくなってしまうかもしれない」と前置きをしたうえで、「人間の労働は稼得だけが目的ではないので、仮にベーシックインカムが支給されたとしても、多くの人々は様々な理由から働き続けるだろう。～中略～ 労働は、人々の生活にメリハリを与え、人間の生活を単調さから救う。職場は他者とのコミュニケーションの場であり、アイデンティティの源泉でもある」と論じているのである（武川 2009：186）。

経営心理学者の飯田は、働くことの意味として、「人間が、何らかの組織において、何らかの役割を果たし、何らかの価値を創造すること」と言う。その上で働くは、「資金・労力・時間などのコスト（資源）を使いながら、それ以上の価値を創造することが、『働く』と呼ぶに値する活動」と論ずる（飯田 2002：22-23）。

飯田は、働くなかに何らかの創造性に富むような価値を見出せてこそ、「働く」と呼ぶにふさわしい行為になると言っているのである。

仕事の思想研究者の田坂は、自らの戦争体験等が軸になっていることに触れながら、仕事における10のキーワードとして、「思想、成長、目標、顧客、共感、格闘、地位、友人、仲間、未来」を挙げている（田坂 2002：6-7）。そのうえで、仕事には3つの観点として、死生観、世界観、歴史観が大切だと言う。『死生観』とは、『生死』という深みにおいて、観ること。～中略～『世界観』とは、『世界』という広さにおいて観ること。～中略～『歴史観』とは、『歴史』という流れにおいて観ること。～中略～ すなわち、『仕事の思想』を身につけるためには、これらの『三つの原点』から、日々の仕事というものを、深く見つめる必要がある」と論ずる（田坂 2002：19）。

田坂は、現実社会の厳しさには理解を示しながらも、個々の事象の歴史や背景、さらには、その実在する生命の重みや深さに思いを馳せ、捉えるからこそ、そこに大切な事柄が見えてくると論じているのである。

キャリアカウンセラーであり、作家の戸田（2007）は、多領域の先人たちからの99の名言を通して、「働く」ということについて切り込んでいる。それらを通して戸田は、人は働くことによって暮らしが豊かになっていくと言う。ただし、そのためには、なぜ働くのかという動機づけや、付加価値を認められるか否かが大きな鍵を握ると論じている。そのことについての比喩的表現が、「働く動機は“エンジン”であり、この“エンジン”を仕事につなぐ“クラッチ”が労働価値である」というものである（戸田2007：175）。戸田は、働くことに価値を見出せてこそ、働くことが現実のものになると論じているのである。

キャリア研究の専門家である高橋は、仕事には、仕事観として、①「功利的仕事観」（お金を儲けたい、出世したい等）、②「規範の仕事観」（人類のために役立ちたい等）、③「内因の仕事観」（楽しい、やりがいがある等）の3つが大切であると言う。なかでも、『『規範の仕事観』こそが、働くことの最大の意義』と述べる。そして、憲法第27条には勤労の意義が明記されていることに触れ、「国民は、勤労を通して価値を生み出し、社会を支える義務がある」と論じているのである（高橋2013：55-60）。

このことに関連して、労働法学者の水町は、各国の労働の捉え方について論究している。ドイツでは判例によると、労働における労務給付は、単に経済的な財ではなく、労働者の人格の発露であると理解することが要求されている。それに対して、日本では、「家族の生活手段を得るための『生業（なりわい）』としての側面とともに、社会（世間）から与えられた自らの分を果たすという『職分』の側面を持つ」と論ずる。他方、日本では働くことは労働者の義務だが、権利ではないという判例があることにも論及しているのである（水町2011：viii-xii）。

高橋や水町の論考から、日本において、人が働くことは義務であることがわかる。それは、憲法上からも、さらには、道徳上からも、である。ただし、働くことは義務として社会から求められる一方で、権利として必ずしも行使できない側面を帯びていることが、水町の論考からわかる。

「京セラ」を設立した、現名誉会長の稲盛は、まさにモノづくりのプロであると共に、経営者としてのスペシャリストである。その稲盛は、働くことについて、「人間は、自らの心を高めるために働く」と述べたうえで、「日々、一生懸命働くことには、私たちの心を鍛え、人間性を高めてくれる、素晴らしい作用がある」と言う。また、大工の棟梁から聞いた言葉を引用し、『『木には命が宿っている』。～中略～『大工の仕事を究める』』ということは、ただ単にかんなをかけて、『素晴らしい建物』をつくり上げる技術を磨くということだけでなく、心を磨き、『素晴らしい人間性』をつくり上げることにもある」と論じているのである（稲盛2016：18-20）。

杉村は、「労働そのものが、『精神労働化』しつつある」と言う（杉村1997：15）。そして、「労働に経済的な意味以上の意味がしばしば求められている」とし、こうした精神的報酬と充実感を

獲得したいと望む人々が増えており、労働の大きな変容の特徴は、「精神労働化と精神的報酬への欲求である」と論ずる（杉村 1997：18）。また稲盛は、「労働の意義は、業績の追求にのみあるのではなく、個人の内的完成にこそある」と述べた上で、かつてドイツ領事から聞いた言葉を引用して、「私たちは自らの内面を耕し、深く厚みのある人格をつくり上げることができる」と論じている（稲盛 2016：23）。

稲盛や杉村の論考から、働くことによる精神的な価値の大切さがわかる。これらのことから、働くことは一時的な達成感を超え、人間形成にも大きな役割を果たしているといえよう。

（3）社会的つながりと社会的承認

飯田は、「人間が、自分の存在意義や社会的価値を示すためには、働くこと（仕事）を通じて何らかの価値を創造するのが、もっともわかりやすい方法」だと述べる（飯田 2002：47）。

武川は、「人間は働くということを通じて、自分が社会に役立っているということを実感する」と述べる（武川 2009：186）。

労働経済学者の玄田は、「自分が何のために働いてきたか考えた方が幸せなのではないかと思う」と述べた上で、「自分とは違う生き方、価値観、働き方の人たちとの緩やかなつながりを持つ中で、初めて、『こういう生き方があるんだ。自分にもできるかもしれない』という可能性が見えてくる』と述べ、さらに、「働くということは誰かにバトンをつなぐこと」と論ずる。（玄田 2006：55-58）。

飯田、武川、玄田の論考から、働くことを媒体にして、得られることへの言及が見られる。それは、働くことを通じて、新たな価値が創造できたり、自己肯定感を得られたり、様々な働き方や生き方というモデルから、自身の今後の可能性等を考えることにつながる、というものである。

コンサルタントの小宮は、「働くとは、仕事を通じて、自己実現する場である」と言い、さらに、「仕事を通じて社会に貢献するために働くのです」と論ずる。また小宮は、他者とのつながりの中にこそ、働く意義があると論じているのである（小宮 2013：11-13）。

女性文化の研究者である坂東は、「多くの人は報酬とは別に、仕事を通じて人や社会とつながり、自分の能力を発揮することに充実感を感じています」と言う（坂東 2013：39）。また、『仕事を通じて社会の役に立つ』『人を支えることができる』という社会的価値や、『よい仕事をしようと努力する』こと自体に意義を見出す。～中略～『人とかかわることができる』『自分が成長することができる』という仕事の非経済的な価値を見直さなければならない」と、坂東は、社会関係の中から生み出される仕事の成果について論究しているのである（坂東 2013：50-51）。

経営コンサルタントの佐藤は、「一昔前までは、社会に出て働くということは、生きるというそのものでありました」と回想しつつ、「いまの時代は、『生きる』ということと『働く』ということ、分けて考える傾向がある」と指摘をする（佐藤 2015：6-7）。このように述べつつ、重い障害をもつ佐藤の子どもの成長過程の中で得た事柄をからめ、「人間は、誰かに喜んでもらっ

ている自分を発見して成長する」と論ずる（佐藤 2015：37）。

櫻井は、「働くことは人に心の張り合いをもたらし、生きていることの素晴らしさを実感させてくれる」と言う。加えて、「社会的な役割や居場所があることで、ひきこもってしまうことを防ぎます。そのことは、育児ストレスから虐待事案に至ることを未然に防止する効果があります。～中略～人は『与えられるだけ』ではなく、社会活動のなかで誰かに何かを与えて、自分も誰かの支えになっているという実感が得られなければ、『生きていて良いと思える』ようにはなれない」と論じているのである（櫻井 2014：200-201）。

小宮、坂東、佐藤、櫻井は、働くということが、他者と互恵的な関係を生み出し、他者から得られる自身への肯定的な反応を通して、多くの可能性に気づけることに論及している。さらに働くことは、それらの相互関係を通じて、人間としての成長にもつながるものであることを示唆しているのである。

4. 生きづらさを持ちつつも精神障害者が働くことの意味と意義

(1) その人が提供しうる最高の成果物としての働き方

精神障害者は、生きづらさを抱えているものの、前述しているように、見た目と経験則によって理解しづらい。ただし、時に、生きづらさの理解の乏しさは世間一般よりも、精神障害を有する本人や家族に見られることもある。特に、生きづらさを抱え始めた初期の段階では、障害を認めづらいことと相まって、疾患や障害を直視することを避けるということもあろう。ただし筆者は、生きづらさに蓋をして、フルタイム労働に果敢に挑戦しては、仕事が続かず、自己評価を下げ、落ち込む精神障害者をこれまで何度となく見てきた。

そのような中、前述したように、働くには、成果物としての作品や広い意味の行為が含まれるということがわかった。また、出産等も働くことに入るという捉え方もわかった。

筆者はこれまで、精神障害者の暮らしの実態から、働くことを①一般就労、②福祉的就労、③ピアサポート⁶⁾活動等の、3つのカテゴリーで整理してきた。ただし、本稿で引用した論者の多くは、働くことに対して、①一般就労をイメージしているだろうし、社会で暮らす多くの者も同様の捉え方をしていると思われる。ところが、働くことに対して、田坂が言う死生観、世界観、歴史観を用いて捉えれば、②福祉的就労や、③ピアサポート活動等も、働くことにつながるようになる（田坂 2002：19）。働くことを、精神障害者の生きづらさを通して、深く、広く、過去から未来への人の状況について鑑みれば、捉え方に大きな変化を生み出すことになる。少なくとも、目の前で暮らしを営んでいる人の現状のなかで、その人が提供しうる最高の成果物としての作品とは何か、で考えれば、働くことはステレオタイプに答えを見出せるものではないことに気づくことができるのである。

例えば、近年、メンタルヘルスのことが注目される中、筆者はかねてより、精神障害者が壮絶な発症を乗り越えて、今を生きている体験は、多くの人たちに生きる勇気を与えると考えてい

る。そのような意味からも、前述③のピアサポート活動として、体験談を仲間に語ったり、普及啓発活動として、社会に発信することこそが、精神障害者が提供しうる最高の成果物に他ならないといえよう。

とはいえ、働いたことによる成果物として、経済的な対価を得ることは、もちろん大きな魅力となる。その一方で、ボランティアワーク、家族間介護に見られるようなアンペイドワーク等も大きな意義が認められるのである。また、ベーシックインカムが政策的に成立するか否かは別にして、仮に成り立つことができれば、精神障害者は、よりこれまでの体験を活かした働き方に傾倒することが可能になるといえよう。宮本が「社会参加型のベーシックインカムは、労働市場に見返りの大きな仕事が増えているなかで、無償労働を活性化させて、地域のさまざまなニーズの解決につなげようとする試みでもある」と論じているのは、まさにこのことを指しているであろう（宮本 2009：136）。

（2）働くことを通して得られる多面的価値

筆者がソーシャルワーカーになったのは、1988年である。その頃、精神障害者が働くことについて、医師をはじめとする専門職は、概して消極的だった。それは、図表2に示しているように、精神障害者が対人関係の苦手さや、コミュニケーション障害を持っていることを注視するあまり、仕事上のストレスによる再発等を懸念していたからである。ところが徐々に、「失敗する権利を保障しよう」というような考え方も出てくるようになった。何よりも、前述しているように、働くことは、労苦の側面も認められるものの、それを超える、いや、想像すらできなかったような価値が得られることが期待できるからであろう。

ただし、働くことの最初の動機づけは、あくまでも経済的側面が大きいだろうし、それは誰にとってもわかりやすいことになる。それが働くことを通して、後付けとして、精神的側面の価値の占める割合が大きくなっていくのである。

杉村は、良い仕事とは、①「仕事を意味あるものと見なす前提にする」、②「仕事に対する真剣で責任感ある態度を求める」、③「生活の必要を充たす」、④「共同生活に貢献する」、⑤「善い生き方と重なる」、⑥「平衡のとれた生活とともにある」、⑦「魅力的である」、⑧「個人を成長させる」、⑨「個人を超える価値につながる」、⑩「求めて初めて得られるものである」、の10の要素を満たすものだと論じている（杉村 1997：207-209）。

その中において、⑨の個人を超える価値という点で言えば、働くことは、個人単位では成しえない価値を見出すことができる。ゆえに、人は一度きりの人生を有意義に過ごすために、多面的価値の獲得を目指して働くのであろう。いや、働くことによって、当初予想もしていなかった成果としての価値が見出せると思うからこそ、挑戦を続ける意義があるといえる。ところが、その働く機会が、精神障害を有しているばかりに得られないとなれば、何ともしない生き方になってしまう。そのように考えれば、たとえ精神障害者が働くことを数回失敗しようが、再び挑戦できるような支援体制を構築することこそが重要だといえよう。

(3) 自己肯定感から一步踏み込んだ自己有用感

精神障害者の暮らしにおいて大切な要素としては、自分自身の暮らしへの想いを挙げる事ができる。それは、「私」が主語になった、無形の主観的な想いである。これは、数値化しづらいものであるが、暮らしに対して、どのように感じ、満足感を抱くことができているか、というものである。

加えて人は、社会的なつながりが構築されていることによって、安心感が得られる。また、自らが気づいていないような長所や可能性を他者から伝えられることによって、精神障害者は自信が得られることにもなる。

そして、それらの機会を得るための近道が働くことだといえる。飯田は、「働くこと（仕事）を通じて何からの価値を創造するのが、もっともわかりやすい方法」だと言う（飯田 2002：47）。また、家族論や学校論等を世に問う批評家の小浜は、「人が働くことをやめないのは、たぶん働くことが、人がこの世界を自分になじませ、自分をこの世界になじませる一番てっとり早い手立てだからである。日々の起居のなかに働くリズムが呼吸のように入り込むことによって、私たちは世界や他者と、全国的にはないにしても、融和し、その手触りを知り、そしてそれによって自分の生というものに節目のあるイメージを与えることができる」と言う（小浜 1993：184-185）。さらに坂東は、「一人ひとりの個人ができることは限られています」と述べている（坂東 2013：50）。

要するに、人は働くことが、社会とつながる一番の近道であり、働くことを通して、無形の多くの副産物を得ることができるのである。それこそが、社会関係の中で得られる自分に対する評価である。中には、自分さえしっかりしていたら周囲の評価は関係ない、という意見もあろう。その通りである。しかしながら、人は社会との関係性の中で、一喜一憂するのであり、その一喜一憂こそが、生きていること、暮らしていることの醍醐味に他ならないといえよう。

そして、それらの社会関係のなかで、暮らしを有意義に過ごすために、必要なものが自己有用感である。自己有用感とは、自己肯定感から一步社会に踏み出した言葉である。3つのしんどさを抱える精神障害者は、失敗体験をすることも少なくない。これらが重なると、自らに対して、過小評価になりやすい。でも、社会で生き生きと暮らすためには、自分の存在が他者に認められつつ、一定の社会的存在感を自身の中に認められてこそ、人は自分らしく生きていけるのである。これらのことから、筆者は自己有用感とは、「社会において、自分が何らかの役割を担っていると感じられると共に、社会から自分が肯定的に捉えられていると実感できている状態」と定義しているのである（青木 2013：22-23）。

これは、小宮が「お客様から、『ありがとう』と感謝されたら、仕事をしていてこれほどの喜びはないでしょう。『仕事をがんばってよかった』と自分の存在意義が感じられるのもこういうときです」と述べていることと通ずるものである（小宮 2013：11-13）。そして、そのことを最も言い表しているのが、以下の佐藤の論考である。「『人生は“ありがとう”を探す旅路』という言葉があります。人生とは、『ありがとう』という言葉をどれだけ集めたかが大切だよという意

味です。たしかにその言葉を集めれば集めただけ、人は成長するのだと思います」(佐藤 2015: 37)。

(4) ストレngths視点による社会の捉え方

精神障害者の暮らしを考えるにあたっては、近年、ストレngthsモデルが用いられるようになって久しい。ストレngthsモデルとは、精神障害者の長所や強みに着眼しようというもので、かたや精神障害者のできない部分に目を向けるのが、欠陥訓練モデルである(伊勢田 2010)。ここからは、筆者のこれまでの取り組みを通して整理した図表3を用いて、精神障害者が働く意義について考察したい。

まず、①からである。過去は有形・無形の既成の事実であり、変更不可能な事柄である。それに対し、未来は、いかようにでも変えることができる。精神障害者は、自身の未来について、働くことをはじめ、取り組み方次第でわくわくしながら、未来を創り出すことができるのである。

働くことは、前述したように、多くの意義が認められる。その一方で、働くことの意義の境地にたどり着くまでには、ストレスに遭遇することも少なくない。そのストレスを回避しようとするのが、②の安全である。しかしながら、働くことには多様な価値があり、その価値を目指そうとするのが、まさに希望だといえる。その際、働くことの意義にたどり着くためには、精神障害者が「行きつ戻りつ」しながらも、③に挙げているように、支援者からの伴走関係によるかかわりが求められよう。支援者のかかわりは、「〇〇さんに、してあげる」という to、あるいは、引率関係ではなく、「〇〇さんと、ともに」という with の併走関係が大切だといえる。ストレngthsモデルにおいて、with は精神障害者を信じ、寄り添いながら共に未来を志向することだといえよう。

次に、④～⑤についてである。ものごとを一度きりの人生で捉えれば、人は可能性を追求することこそ、望んでいるといえる。その際、重要となるのは、既存の事柄もさることながら、明日に向かう、未確定部分への挑戦なのである。過去は変えられなくとも、未来は、自ら及び社会の可能性を信じることによって、切り拓くことができるといえよう。

	ストレngthsモデルの着眼点	欠陥訓練モデルの着眼点
①	未来	過去
②	希望	安全
③	伴走：with	引率：to
④	可能性	既存
⑤	挑戦	失敗
⑥	喜び	悲しみ
⑦	共感	慰撫

図表3 ストレngthsモデルと欠陥訓練モデルとの着眼点の相違

大事なことは、「失敗 or 成功」というカテゴリーではない。そうではなく、挑戦するか否か、のカテゴリーで考えることこそが肝要なのである。人は、できる限りの取り組みをした結果の失敗であれば、後の人生において、肯定的に捉えることができるだろう。ただし、3つのしんどさをもつ精神障害者に対して、単に挑戦を勧める、という支援方法は確かに乱暴である。そのことから、大切なことは、安心して挑戦できるような支援体制をいかに構築できるかが鍵を握ることになるだろう。

そのためにも、精神障害者が、働くことに果敢に挑戦するためには、生活支援体制が求められる。かくて、これらの支援体制があれば、仮に失敗したとしても、失敗が明日への糧に変換されるのである。ところが、支援体制が一切なければ、失敗が挫折感につながってしまいかねない。ゆえに、フォーマル・インフォーマルな社会資源が構築された生活支援システムが重要となるう。

そして、最後に⑥と⑦である。人が、本当の意味で求めているのは、失敗した時や傷ついた時に、なぐさめとして慰撫いぶされることではなく、嬉しい時に、共感してくれる人や場ではないかと思う。むろん、悲しいときに相談できる人や場がないことはつらい。だが、嬉しいときに報告できる人や場がないことは、孤立感を伴うほど、むなしいものなのである。人には元来、何らかの問題により傷ついたとしても、それらに対峙し、元の状態に戻る力が備わっているとされている。それは、ストレスにより圧迫されたとしても、元の状態に戻るかの如く回復に向かう力である。このことは、個人のみならず、集団、あるいは、地域社会全体においても、同様の力を認めることができる。

ゆえに、これらのことを総じて言えば、人は社会で傷つくことがある。時には、ノックダウンするほど打ちのめされることもあるだろう。そうなってしまえば、しばらく、社会に出るのを躊躇するだろう。ところが、人は社会と距離をとって、一人で家にいても、本当の意味での傷は癒されないのである。では、どのようにすれば、その傷がいやされるのか。それは、他でもない、かつて傷ついたはずの社会に出かけてみることであり、その方法の一つが働くことになるだろう。そのようなことから、社会には様々な魅力あふれる側面が認められ、その社会を可能性の宝庫として捉えていくことが、ストレングスモデルであるといえよう。

5. おわりに

本稿では、「働く」ということの意味や意義について、一定程度迫ることができたと思っている。働くとは、前述したように、経済的、精神的という両面において多面的な価値が認められる。また、その価値は、暮らしを営むにあたって役立つというレベルではなく、人間形成、人間成長として不可欠なものであるともいえる。しかし、これまで筆者をはじめとする支援者は、精神障害者が実際に働くことと生活支援とを切り分けて捉えてきた側面が否めない。そうであるとすれば、本稿がそのきっかけになれば、と願っている。

一方で社会への普及啓発活動として、例えば、「障害者」という言葉を視覚から伝えようとする場合、白杖を持っている人や、車いすに乗っている人のイラストを使うことが多い。でも、障害者には精神障害者をはじめ、内部障害者も当然に含まれる。ひるがえって、社会はこれまで、精神障害者が働くことについて、製造業や、経済的報酬を伴うペイドワークのみをストライクゾーンとして、捉えていた部分が否めない。しかし前述したように、働くことによる最高の成果物を考えれば、例えば、メンタルヘルスの普及啓発の講師等は、精神障害者のストレンクスが活かされることになろう。わかりやすく言えば、製造業に精神障害者が就くことは、精神障害による生きづらさを抱えない者より成果が低くなりやすい傾向にあらう。ところが精神障害者の体験に基づく講演は、精神障害による生きづらさを抱えない者よりも、成果はより高いものが期待できよう。かといって、筆者は、精神障害者にアンペイドワークを中心に勧めようとしているわけではない。なぜなら、経済的報酬が魅力に富むのは、当たり前すぎるほどの事実だからである。

論じたいことは、多様な視点をもって、従来の捉え方に束縛されずに、働くことを考えたいということである。ジョアンは、先行研究を通して、人生の意味の一つとして、楽しいと思える仕事に就くことを挙げている。また、人生の目的として、生きたものを創造することだと論じている（Joanne2000：366-371）。このように、働くことが、有意義な人生を送るための全てではないにせよ、楽しく働いた経験が、人間のよりよい人生につながるのならば、働くことに挑戦しようとするのは自明のことであらう。

では働くことが、いかにして生きる力を創造するのか。倫理学者であると共に思想家の内田は、「仕事を通じて私たちがしようとしているのは、『パスを出す』ことである。多彩で予測不能の攻撃の起点となるような絶妙の『パス』を『次のプレーヤー』の足元に送り込むこと、それだけである」と言う（内田 2011：44）。社会において、周囲に絶妙のパスが出せるということは、何とも素敵なことである。これらができることには、誰もがあこがれるだろう。それは、精神障害の有無を問わず、である。

ただし本稿では、精神障害者が生きづらさを持ちつつも働くにあたって、どのような具体の支援システムを構築すべきかについて、ほとんど言及できなかった。これは、積み残した課題として、今後の取り組みとしたい。

自己実現を筆者なりに述べるとすれば、一度きりの人生を、その人なりにその人らしく生きていく方法の追求、ということになる。精神障害者が働くことを通して、自己実現を目指し、「幸せになりたい」と願うのは、当たり前のことである。筆者は、そんな当たり前の想いに真摯に向き合っていくことを約束して、ひとまず筆をおくことにしたい。

*本研究は、平成25～28年度JSPS科研費25380792「精神障害者の生活支援における障害年金と就労との関係性」による研究成果の一部である。

註

- 1) 「働く」という用語は広い。類似語としては、仕事、労働、就労、雇用、活動等が挙げられる。本稿では、働くということについて、多様な捉え方や可能性を得たいことから、あえて明確な分類はしない。とはいえ、本稿では働くことを、概ね、直接的・間接的を問わず、社会関係における活動と定義したい。また、その際、活動の範囲は法的及び道徳的な観点から、社会の理解が概ね得られるものとする。
- 2) 本稿で精神障害者と言う場合は、精神障害によって、精神疾患と精神障害を併せ持ち、日常生活に継続して活動制限や参加制約を受けている者をさす。
- 3) 「生きづらさ」という用語は、近年用いられることが多くなっている。精神障害者の暮らしの制限を表す言葉としては、谷中の「生活のしづらさ」を代表的なものとして挙げるができる（谷中 1996：163-178）。筆者は、暮らしにおける具体的な活動制限や様々な場面への参加制約に加えて、自らの障害の受け入れの葛藤、社会関係の中で起こる障壁を含め、障害によって発生する間接的な事柄も含めた用語として、生きづらさを用いるものである。
- 4) 精神保健及び精神障害者福祉に関する法律の医療保護入院や応急入院、そして、措置入院という入院形態では、たとえ本人が入院を拒否したとしても、精神保健指定医の診察の結果、一定の条件のもと、治療上の必要性が認められれば合法的に入院が認められるというものである。これらの入院形態を、非自発的入院と位置づけ、その在り方を巡って、議論は繰り返されている。とりわけ、社会を震撼させるような事件が、多少なりとも精神疾患との関係が認められれば、国や地方自治体において、検討会等が設置される現状がある。
- 5) 1980年代、精神障害者がテレビ等に登場する場合は、ほぼモザイクがかかっていた。精神障害者は、多大な保護をしないといけない対象であり、主体的な活動をする者として認識されることは少なかった。それが、北海道浦河の「べてるの家」、さいたま市の「やどかりの里」の活動等が、マスコミで取り上げられたりするなかで、徐々に変化を遂げている（浦河べてるの家 2002；浦河べてるの家 2005；やどかりの里 30周年記念出版編集委員会 2000；増田 2005）。テレビには、「べてるの家」や「やどかりの里」の利用者が、当たり前のように映るようになった。また、精神障害者の手記が出版され、そこには、発症時の自身の想い、生きづらさとの付き合い方等が綴られているのである（黒川 2010；森 2006；リカバリーを生きる人々・佐竹直子 2016；やどかりブックレット編集委員会 2014等）。実際、筆者も、大学の精神保健福祉に関する講義において、精神障害者をゲストスピーカーに招き、体験談等を語ってもらうことは、もはや当たり前のこととして定着している。
- 6) ピアサポートとは、同じような体験をした者が、対等な関係で仲間を支え合うことを言う。そのようなことから、精神障害者同士の支え合う機能は、まさにピアサポートであるといえる。

文献

- 青木聖久（2010）「精神保健福祉士による相談援助活動」青木聖久他編『新版精神保健福祉・全訂版』学文社，111-131
- 青木聖久（2013）『精神障害者の生活支援』法律文化社
- 飯田史彦（2002）『働くことの意味がわかる本』PHP 研究所
- 伊勢田堯（2010）『『人間中心のサービス』を目指して ―統合失調症患者の結婚支援を例に考える―』『作業療法ジャーナル』44（7），528-533.
- 稲盛和夫（2016）『図解 働き方』三笠書房
- 今村仁司（1998）『近代の労働観』岩波新書
- 内田樹（2011）『期間限定の思想』角川文庫
- 浦河べてるの家（2002）『べてるの家の「非」援助論』医学書院
- 浦河べてるの家（2005）『べてるの家の当事者研究』医学書院
- 大川弥生（2011）「ICFの活用：『生きることの全体像』についての『共通言語』として」『厚生指針』

58 (1), 27-31.

北島貞一 (1999) 『自己有用感』 田研出版

黒川常治 (2010) 『焦らない, でも諦めない』 やどかり出版

玄田有史 (2006) 「外の世界に触れてみる」 日本経済新聞社編 『働くということ』 日経ビジネス文庫

小浜逸郎 (1993) 『家族を考える 30 日』 JICC 出版局

小宮一慶 (2013) 「仕事を通して社会に貢献しよう」 PHP 研究所編 『新版 なぜ働くのか』 PHP 研究所

櫻井純理 (2014) 「誰もが働ける社会／生きていける社会」 筒井美紀, 櫻井純理, 本田由紀編 『就労支援を問い直す』 勁草書房

佐藤芳直 (2015) 『役割 なぜ, 人は働くのか』 プレジデント社

障害者福祉研究会 (2002) 『ICF 国際生活機能分類 一国際障害分類改定版一』 中央法規出版

杉村芳美 (1997) 『「良い仕事」の思想』 中公新書

杉村芳美 (2009) 「人間にとって労働とは」 橋木俊詔編 『働くことの意味』 ミネルヴァ書房

高橋俊介 (2013) 「プロフェッショナルとして働こう」 PHP 研究所編 『新版 なぜ働くのか』 PHP 研究所

武川正吾 (2009) 「ベーシック・インカム」 橋木俊詔編 『働くことの意味』 ミネルヴァ書房

田坂広志 (2002) 『なぜ働くのか』 PHP 研究所

橋木俊詔 (2009) 「働くということ」 橋木俊詔編 『働くことの意味』 ミネルヴァ書房

戸田智弘 (2007) 『働く理由』 ディスカヴァー・トゥエンティワン

坂東眞理子 (2013) 「稼ぐだけが目的ではない」 PHP 研究所編 『新版 なぜ働くのか』 PHP 研究所

増田一世 (2005) 『もう1つの価値』 やどかり出版

松村明編 (2006) 『大辞林第3版』 三省堂

松山純子 (2013) 『障害年金をもらいながら働く方法を考えてみませんか』 日本法令

水町勇一郎 (2011) 『労働法入門』 岩波新書

宮本太郎 (2009) 『生活保障』 岩波新書

森実恵 (2006) 『なんとかなるよ統合失調症』 解放出版社

やどかりブックレット編集委員会編 (2014) 『あきらめない恋愛と結婚 精神障害者の体験から』 やどかり出版

やどかりの里 30 周年記念出版編集委員会編 (2000) 『職員主導からともに創り合うやどかりの里への転換』 やどかり出版

谷中輝雄 (1996) 『生活支援』 やどかり出版

リカバリーを生きる人々・佐竹直子編 (2016) 『わたしと統合失調症』 中央法規出版

Joanne, B Ciulla (2000) *THE WORKING LIFE*

(ジョアン・キウーラ著=金井壽宏監訳 (2003) 『仕事の裏切り なぜ, 私たちは働くのか』 翔泳社)

Rapp, Charles Anthony and Goscha, Richard Joseph (2006) *The Strengths Model-Case Management with People with Psychiatric Disabilities, Second Edition*

(チャールズ・A・ラップ, リチャード・J・ゴスチャ著=田中英樹監訳 (2008) 『ストレングスモデル 精神障害者のためのケースマネジメント第2版』 金剛出版)